

ICT教育の推進

印西市立いには野小学校校長 まつばら かずひろ
松原 一弘



1 はじめに

本校は千葉ニュータウン東部に宅地造成された地区に開校し、本年度で創立23年目である。令和元年度に隣の宗像小学校を統合し、印西市内で学区が一番広い小学校となり、現在437名の児童が生活している。学校の周辺は、緑豊かな自然環境に恵まれており、また学校・駅・公園・歩道等のバリアフリー化が図られていて、街全体が人に優しいつくりとなっている。保護者の教育に対する関心は非常に高く協力的で、本の読み聞かせや学習支援ボランティア等、積極的に活動をしていただいている。教職員は県職員・市職員あわせて38名、ベテランが多い職場であるが、皆協力的で「チームいには野」の実現に努めている。

2 研修への取組

GIGAスクール構想により1人1台タブレットが実現した令和3年度から、『情報教育～ICT機器の効果的な活用について』を研究テーマとし、特にICTに対する苦手意識を解消するために、「とにかくやってみよう」を合言葉として職員研修を積み重ねてきた。

(1) ICT機器や授業支援アプリの操作習得

令和3年度は研究主任を中心に、クロームブック（ICT機器）の操作方法や様々なアプリの実技研修を行った。（表1参照）ゼロからのスタートであったため、習得までに時間がかかったが、少しずつ成果が現れるようになるとお互いに教え合う姿も見られるようになり、教職員のスキルは確実に向上していった。

表1 実技研修の内容

クロームブック (ICT機器)	・クラスルーム ・ドキュメント ・スライド ・ドライブ ・ミート ・スプレッドシート
授業支援アプリ ・ ロボット	・ロイロノート・スクール ・ミライシード (オクリンク・ムーブノート・ドリルパーク) ・Scratch ・メカトロウィーゴ ・Viscuit

(2) 習得したICT技術を使っでの授業展開

次の段階として、「児童がICT機器や授業支援アプリを使って効果的に学習するためには、どのようにしたらよいか」というテーマで授業実践を行い、ICT機器やアプリの使い方の共有を図った。トップバッターとして研究主任が授業を行い、ロイロノートやミライシード、クラスルームを活用した授業実践に対し、教師同士の意見交換を積極的に行った。令和3年度は講師を招聘しての研究授業は行わなかったが、略案を書いたの研究授業を計19回実施し、1年間の成果が多く報告された。（表2参照）

表2 研修の主な成果と課題

- ・「とにかくやってみよう」という新しいチャレンジができた
- ・ICTに対する苦手意識の解消ができた
- ・学年内や校内で効果的な実践方法の共有ができた
- ・児童や教職員のスキルが確実に向上し、授業改善につながった
- ・児童の技能向上についての実態を調査する必要がある
- ・使い方等、ITリテラシーに関する指導も必要になってきた



(3)ICTに関わる実践研究の推進

令和4年度になり、昨年度を基礎にしてさらなるICTの効果的な活用方法を見い出すために、以下のような研究主題で研究に取り組むこととした。

研究主題

児童がICT機器や授業支援アプリを使って効果的に学習するためには、どのようにしたらよいか
～児童の学習意欲や理解力の向上を目指して～

すべての教員が研究授業を行い、今年度は毎回講師を市教育委員会から招聘し、主題解決のための指導をしていただくこととした。またコロナウィルスの感染防止の観点から2年間中止となっていた市教育研究会授業研修会が11月に本校で行われることとなり、これまでの積み重ねを市内の小学校教員に紹介する場があることを、ひとつの励みとして研究を推進した。

①実践事例＜1年生・道徳・市教研＞

クロームブックを使い、ロイロノートの共有ノートを活用した授業の中で、「しんせつとはどういうものだろう」ということについて考えた。今までであれば話し合い活動を行うところを、ロイロノートの性質を活かして、共有ノートで考えを共有し、友達の考えを見ながら、自分の考えを深めていった。また、授業の終わりには校内研修会で講師から教えていただいたグーグルのアンケート機能も活用して、考えの変容も比較できるようにした。



②実践事例＜5年生・算数・市教研＞

「平行四辺形の面積の求め方を考えよう」の授業の中で、クロームブックを操作し、デジタルコンテンツを使って、平行四辺形を切ったり、繋げたりして、変形させながら面積を求める活動を行った。また、ロイロノートの共有ノートを活用し、グループや全体に、自分の考えを発信したり、友達の考えや表現を理解したりする中で、より深い学び合いの授業が展開できた。振り返りにはフォームスを使用することで、授業時間ごとの振り返りを記録していくことができ、効果的であった。



3 おわりに（成果と課題）

ICT機器や授業支援アプリの有効活用を目指して研修を推進してきたところであるが、教科や指導内容は多種多様であり、上手くいった活用方法が、いつでも上手くいくとは限らない。デジタルと黒板やノートなどのアナログの活用については、どちらもメリット・デメリットがあるので、単元や活動などによってよく見極め、使い分けをしていくことが大切である。

しかしICT活用によりこれまで紙やアナログで行ってきたことが素早く短時間に行えることや、全児童参加型の意見交換が行える等デジタルの良さを生かした授業改善を、これからも研修によって推進していき、学校経営の指標『すべては子ども達のために』のもと、児童の学力向上を実現していきたい。